

井伊氏サバイバル

五〇〇年

大石泰史

在庁官人、御家人、国衆——  
そして近世大名へ！

大河ドラマ

『おんな城主 直虎』

時代考証担当者

が描く、

井伊氏、苦闘の500年史。



井伊氏サバイバル五〇〇年

大石泰史

星海社

97





プロローグ 井伊氏研究と「おんな城主 直虎」

本書のねらい

二〇一七年のNHK大河ドラマは、『おんな城主 直虎』である。

同作の主人公である「井伊次郎法師直虎」は、「徳川四天王」の一人とされる井伊直政の養母で、女性でありながらも井伊家の家督権を持っていた人物とされる。

井伊氏は古代以来、遠江国引佐郡井伊谷（静岡県浜松市北区）に居点を置いていた。後に「徳川四天王」などとされる井伊直政が家康を主君に仰いだことから、井伊氏は大名に取り立てられる。さらに近世において彦根藩（滋賀県彦根市）の大名となり、いわゆる「大老」職という幕閣最高の地位に立つ人物を、幕末までに五人も輩出した（幕末の井伊直弼が著名）。

戦国期に「国衆」として存在し、「生き残り」に最も成功した氏族のように見える。

私は、東海地方の戦国大名で、駿河・遠江（以上、静岡県中部及び西部）、三河（愛知県東部）と

尾張（愛知県西部）の南の一部を支配した今川氏を主な研究テーマとしており、今川氏の関連文書集『戦国遺文』今川氏編第一〜五巻（東京堂出版 二〇一〇〜一五）をまとめたこともある。

史料集編纂時には今川氏の史料だけでなく、井伊氏を含む領国下の武将たちの関連文書も蒐集したが、それは研究テーマに今川氏の被官（家臣）等も含んでいたためであった。井伊氏についてもその関連で過去に論文を発表しており、その際には今川氏からの視点に重点を置いて検討を加えている。

しかし、直虎・直政を始めとする「井伊氏サイド」から視点を向けると、まだまだ検討しきれしていない部分が多く残されていた。そのため、直虎という人物を含め、改めて史料に則して検討を加えてみたい、そう思って本書の筆を起こし始めた。

中世の井伊氏研究は全体的に少なく、主要論文の多くは二〇〇〇年前後までに発表されている。つまり、近年の研究成果が反映されていないのが実情である。また、鎌倉〜室町期の検討が不十分という面もある。ということは、中世全般において再検討が求められているのである。

### 国衆研究と井伊氏

ところで私は、二〇一六年の大河ドラマ『真田丸』が、「国衆」という言葉を視聴者に浸透

させたことには、非常に大きな意味があると捉えている。

『真田丸』の主人公は真田信繁であるが、彼の実家の真田家は、信濃国小県郡（長野県青木村・上田市・長和町、東御市の一部）を居点とする氏族で、上杉・北条・徳川といった大大名に囲まれていた。戦国期、真田氏は郡規模で在地を支配した領主であり、在地に根付き、地元への統制力や指導力、軍事力や税の徴収権等を持っていた。こうした真田氏を始めとする戦国武将たちを、研究者は「国衆」と呼ぶのである。

「国衆」は全国に存在しており、井伊氏は遠江の国衆であった。国衆の研究は、その解明で大名の位置付けが相対的に理解されることとなるため、現在も継続して行われている。本書はそれらの国衆研究の成果に学び、発展途上にある戦国大名研究の一助にしたいと考えている。つまり「最新の国衆研究を盛り込んだ井伊氏に関する概説書」にしたいと考えている。

となると、先述のように「井伊氏サイド」からの見直しが重要となる。その場合、「生き残り」を賭けた井伊氏の姿を浮かび上がらせる必要がある。

どういうことかという点、中世において国衆は、前の世代の人物から代が替わると、その次世代は前代の政策や戦略・戦闘を踏まえて生き残る方法を模索する。その「生き残り」を賭けた彼らの選択が成功し、生き残った彼らが「歴史」を書き綴る（『文書史料の作成』。現代に生きる私たちは、「生き残り政策」の「成功譚」を単純に「歴史的事実」として認識するの

ではなく、「成功譚」の虚実を明確に区分することで、はじめて国衆たちの実態を解明することができるのである。

そして、井伊氏についてはこうした観点からの研究が不十分だったのである。

### 本書の構成と方法論

そこで本書では、「中世の井伊氏」を理解するために、系譜的には古代とされる時代から「徳川四天王」の井伊直政までの約五〇〇年間に絞ることにする。その際には文書史料を重視し、それらをじっくり読み込んで井伊氏の再検討を試みたい。

本書の構成は以下の通りである。

鎌倉期までの井伊氏については事実の確定を中心に、嫡流とは違う別流の井伊氏を摘出することに重点を置いた(第一・二章)。

また室町・戦国期、特に第三・四章においては、国衆としての井伊氏の脆弱性を中心に延べた。さらに直虎という人物像を明らかにするため、第六章において残された文書を丁寧に捉え直してみた。彼女(彼?)の関連文書のうち五件六点は「井伊谷徳政いのやとくせい」と呼ばれる研究的にも重要なテーマに関するものである。その点も含め、第七章で改めて検討を加えてみた。

さらに第八・九章では、直政について取り扱う。二〇一六年十月五日現在、彼の受発給文



書と関連文書は、合計三四一通が確認されている。その残されている史料を一点ずつ検証することで、彼の人物像を浮き彫りにした。なお、彼の関係文書については、後日『戦国史研究会史料集五 井伊直政関係文書集』（二〇一七年刊行予定）として紹介するつもりである。

### 「文書史料」の区分

なお、本書では「文書史料を重視する」としているが、ここで言う「文書」とは、同時代に受・発給された書状（手紙）や、領主層から出された権利書類（土地を安堵・宛行あてぎった史料）などのことである。同時代の史料であるのだから、一番信用が置ける。つまり、実像を把握するためには、そうした史料の解析が望まれるのだ。

また「同時代」ということであれば、文書だけでなく、当時は日記や紀行文等を記録している人たちもいたので、それらを参照することも必要である。同様に、寺社が堂宇等を建立した際、その事実を木札に記して梁等はりに打ち付けた棟札むなふだや、円形の銅板などに仏像を彫り込んだり浮き彫りにしたりして堂内に懸けた懸仏かけほとけ等の銘文も注視しなければならぬ。こうした「同時代の証言」（これを研究者たちは「一次史料」と呼んでいる）から、新たな井伊氏像を構築したいと考えている。

その一方で、まったく同時代の史料は存在しないものの、過去帳や位牌、さらには系図・

家譜類などのいわゆる「編纂物」でしか記述されない情報もある。特に系図や家譜を史料として扱う際には注意しなければならない。これらは記載した氏族にとって「都合のよい」部分しか書かれない場合があり、客観性が失われて疑わしい面が多くなるのである。

こうした編纂物は「二次史料」と呼ばれており、一次史料よりも信頼性に欠ける。しかし、二次史料であってもその史料が作成された意味や背景を考えると、真実の一部が見えてくるときがある。一次史料を編集して作成された二次史料であれば、真実とされる部分は当該期を物語っているとも考えられるのだ。

こうした二次史料は、当該期を語った部分とそうでない部分を峻別することで、別の情報を提示してくれる場合がある。史実でない部分が抽出されたとき、その部分がなぜ挿入されることになったのかなど、別な史料の活かし方を考えることも可能となるのだ。丁寧な史料の峻別作業は、研究上、必要不可欠なのである。

これまでの井伊氏に関する一般書は、「井伊家伝記」（以下「伝記」と省略。国立公文書館所蔵本を使用。後述）や「井伊年譜」（以下「年譜」。東京大学史料編纂所蔵本を使用。後述）といった二次史料を主要な材料とすることが多かった。しかし、本書では一次史料を重視し、二次史料の扱いに注意しながら語るようにする。

なお本書では、普段、歴史に関わっている私たちがどういったことに注意しているのか知

ってもらうために、少々回りくどい表現をしている部分もある。

また史料を引用する際、基本的に大意で提示するようにした。そのため、史料の原本に若干の解説を加味した表記や、一部の省略、解釈による段落の前後の組み替え等がなされる場合があることをお断りしておく。

プロローグ 井伊氏研究と「おんな城主 直虎」

3

本書のねらい 3

国衆研究と井伊氏 4

本書の構成と方法論 6

「文書史料」の区分 7

【凡例】 22

第二章 系譜史料から見る古代の井伊氏

25

井伊氏の本拠・遠江国井伊谷 26

井伊氏の起源に関する問題 29

## 第二章 鎌倉時代の井伊氏

- 「良」字と「共」字 33
- 共資と共保の伝承 34
- 村櫛の地と井伊氏 36
- 井伊氏の初見史料 40
- 「介」を称する井伊氏 41
- 「井伊介」について 43
- 六条八幡宮造管注文の「井伊介」 45
- 『鏡』に見える井伊直綱 48
- 「懸仏」に見える井伊直之 51
- 井伊氏の経済基盤 53
- そのほかの鎌倉期井伊氏関係史料 54
- 在庁官人から御家人へ 56

# 南北朝時代の井伊氏

南北朝期の井伊氏 60

「架空の井伊介」道政 61

井伊氏、南朝へ 62

南朝に従った時期は？ 64

西国に出張る井伊介 66

最後の井伊介関係文書 68

①の発給者は今川了俊 70

最後の井伊介は惟昌 72

遠江から離れた嫡流 74

# 井伊氏一族と室町期の井伊氏

1 室町期までに分かれた井伊氏の一族

第五章

戦国前期の井伊氏

95

1 室町中期～戦国前期の遠江

96

2 在地に見える井伊氏

85

井伊二郎の登場

85

「直」字が席卷する井伊谷

87

井伊直貞と「おくない」

90

澁川井伊氏の台頭

92

井伊氏一族「中野氏」

78

井伊朝藤について

81

英比氏と小野氏

83

当該期の遠江研究史 96

今川氏と井伊氏 97

駿河今川義忠の駆逐 100

井伊氏と横地・勝田氏 102

井伊氏の「惣領」職の行方 105

## 2 戦国前期の井伊氏 107

井伊氏伝承の情報源 107

井伊氏の一門・家臣について 109

小野氏について 111

奥山氏の閨閥けいぼつ 114

## 3 戦国前期の井伊谷井伊氏 116

直平の発給文書 116



遠江斯波氏と井伊氏 118

直宗の没年に関する疑問 120

直宗存在性への疑問 122

直満・直義による今川氏への謀叛 125

謀叛は事実か？ 126

直満・直義を謀叛人とするのは？ 130

今川氏と親密化する澁川井伊氏 132

## 第六章 井伊直虎とは何者か？ 133

### 1 「次郎法師直虎」を探る 134

直虎期の遠江 134

通説の次郎法師直虎①―直盛の死没まで

通説の次郎法師直虎②―家督の継承 138

通説の次郎法師直虎③―後半生 140

系図上の次郎法師 142

「伝記」成立の意味 143

次郎法師登場の背景 145

異質の系図 147

## 2 「次郎法師直虎」は「おんな城主」か？ 150

今川氏親こうしつ後室寿桂尼について 150

家督を担った寿桂尼 153

古河公方家の“当主代行者”①経緯 155

古河公方家の“当主代行者”②「芳春院殿」の登場 157

次郎法師は“当主代行者” 160

## 3 次郎法師直虎の文書 162

次郎法師の関連文書 162

鯉田の検見所 166

次郎法師の置文 169

〳〵当主代行者 としての次郎法師の立場 171

## 第七章 次郎法師直虎と井伊谷徳政 173

### 1 井伊谷徳政を知るために 174

徳政令とは 174

徳政の種類 175

徳政要求が生じるまで 177

徳政を嘆く人々 179

三遠での徳政要求運動の激化 180

## 2 井伊谷徳政を読み解く 182

井伊谷徳政の経緯 182

登場人物と概要 185

銭主瀬戸方久ほうきやう 188

在地の有力者井伊主水佑 191

徳政の対象者は？ 193

匂坂直興なほきの文書から 195

④文書の解釈 197

次郎法師から見た井伊谷徳政 200

戦乱の世を“生き抜く”ために 202

## 第八章 井伊直政の登場 205

天正前期の遠江 206

通説への疑問 208

当主不在の井伊谷 209

井伊谷三人衆の登場 211

菅沼氏と近藤氏 214

鈴木氏と三人を繋いだ菅沼定盈 216

井伊直政の登場 218

## 第九章 井伊直政の実像 221

### 1 従来 of 直政像と文書の直政 222

羽柴(豊臣)政権下の直政 222

「年譜」「伝記」と他書との比較 225

奉者・井伊兵部少輔 227

奉者の比較 230

小牧・長久手合戦と直政 232

天正十二年頃の直政 234

第一次上田合戦と直政 235

## 2 秀吉生前期の直政 238

聚楽第行幸と武将たちの家格 238

直政の侍従任官 241

京都徳川邸への秀吉の御成 243

秀吉の家格秩序の枠組みから 245

## 3 秀吉没後の直政 247

秀吉の死と直政 247

「先勢」としての直政 252

「先勢」を解任されない理由 255

土佐浦戸城と直政 257

毛利・吉川氏との交渉 259

島津氏との交渉 260

新たな手筋としての黒田氏 262

長政あつての直政 264

もう一つの直政の評価 266

文書が語る真の“直政”像 268

エピソード  
「国衆」井伊氏の五〇〇年 270

あとがき 276

参考文献 279

〔凡例〕本文中の史料出典略記号は以下の通り

『静岡県史』資料編●↓『静岡』●+文書番号 『静岡県史』中世資料編補遺↓『静岡』補遺+文書番号  
『愛知県史』資料編●↓『愛知』●+文書番号 『山梨県史』資料編●↓『山梨』●+文書番号

※いずれも●は巻数番号

『新編岡崎市史』古代中世6↓『岡崎』⑥+頁数

『鎌倉遺文』↓『鎌遺』+文書番号 『南北朝遺文九州編』↓『南九』+文書番号

『戦国遺文今川氏編』↓『戦今』+文書番号 『戦国遺文後北条氏編』↓『戦北』+文書番号

『戦国遺文武田氏編』↓『戦武』+文書番号 『戦国遺文古河公方編』↓『戦古』+文書番号

『戦国遺文房総編』↓『戦房』+文書番号 『国史大系 吾妻鏡』↓『鏡』+頁数

中村不能齋編 『井伊直政・直孝 中村不能齋遺稿』（彦根史談会 一九五一）↓『不能齋』+頁数

中村孝也 『新訂徳川家康文書の研究』上↓『家康』上+頁数（下巻之一は『家康』下+頁数）



国立公文書館所蔵「井伊家伝記」↓「伝記」彦根城博物館所蔵彦根藩井伊家文書「井伊年譜」↓「年譜」  
『群書系図』「井伊系図」↓『群書』『尊卑分脈』↓『尊卑』『寛永諸家系図伝』↓『寛永伝』  
『寛政重修諸家譜』↓『寛政譜』

井伊直虎とは

何者か？

直宗

井伊直宗傳  
天文五年壬午九月為直元前母攻  
三列直宗有父知元  
善為況心所求也

直盛

井伊直盛傳  
永祿三年壬午九月直盛元子孫侯  
嗣直盛元子孫侯  
龍澤守天運道繼

直親

直親傳  
天文五年壬午九月直親元子孫侯  
嗣直親元子孫侯  
龍澤守天運道繼

夫為二而直高方

直滿

夫為二而  
天文五年壬午三月直滿元子孫侯  
嗣直滿元子孫侯  
同心流世後身也

直滿

夫為二而  
井伊直滿守

直義

夫為二而  
天文五年壬午三月直義元子孫侯  
嗣直義元子孫侯  
同心流世後身也

直

夫為二而  
井伊直元傳  
天文五年壬午九月直元元子孫侯  
嗣直元元子孫侯  
龍澤守天運道繼

直元

夫為二而  
天文五年壬午九月直元元子孫侯  
嗣直元元子孫侯  
龍澤守天運道繼

南溪

夫為二而  
天文五年壬午九月直元元子孫侯  
嗣直元元子孫侯  
龍澤守天運道繼

直

夫為二而  
井伊直元傳  
天文五年壬午九月直元元子孫侯  
嗣直元元子孫侯  
龍澤守天運道繼

# 1 「次郎法師直虎」を探る

## 直虎期の遠江

ようやく本書の主人公である次郎法師直虎の段階まで書き継いできた。次郎法師直虎は、井伊直盛と新野左馬助親矩の妹（祐椿尼<sup>ゆうちんに</sup>）との間に生まれた女子（後述）とされる。以降、基本的には次郎法師と表記するが、場合によって直虎とする場合があることを付言しておく。まずは次郎法師の生存期間中の遠江情勢について、まとめておこう。

天文十三年末、第二次河東一乱に直満ら一部の武将たちは同調したものの、基本的に井伊氏は静観を続けた。他の遠江国内の武将たちも挙兵することはなく、同十四年段階で遠江国内に大きな動揺はなかった模様である。

翌年六月、今川氏は田原方面へ軍事行動を起こし、戸田氏と抗争を開始した。同年末には北遠の犬居天野氏も今橋城（豊橋市）で合戦を行っており、史料には残されていないものの、井伊氏も三河方面へ出兵した可能性がある。

これ以降、今川氏の軍事行動は三河に移り、遠江国内で大きな問題は起こっていない。弘治年間、三遠国境付近の三河国衆である菅沼・奥平・牧野の諸氏が一族内部で親今川と反今

川に分裂した。反今川方は三者で結託したらしく、かなり大規模な紛争となったものの、その余波が遠江国に波及したという史料は残されていない。

しかし永禄三年、今川義元が桶狭間で横死すると、状況は一変した。永禄元年に駿河・遠江の支配を任されていた義元の嫡男氏真から、三河の国衆たちは次々と離叛を始めた。

特に松平元康（後の徳川家康。以下、徳川家康で統一）は永禄四年には独立を始め、翌年には井伊氏、さらに同六年には引間（浜松）の飯尾氏などを調略したようである。二俣の松井氏、犬居の天野氏も今川氏に対して叛乱を起こした。これを「遠州念劇」といった。永禄八年初めには今川氏の領国は駿遠のみとなってしまった。

その後、氏真は領国の維持に尽力し、上杉氏と手を結ぼうとした。しかしその努力の甲斐もなく、結局永禄十一年十二月に武田信玄の駿河侵攻を招き、氏真は駿河府中を放棄した。同時に家康が三河から遠江に侵攻してきたため、氏真は遠江国懸川城に籠城する。氏真は翌年五月に懸川城を徳川氏に開城し、北条氏を頼っていった。

今川領国を奪取した武田と徳川の両者は「国分」で揉めることになり、東遠で戦鬪が繰り返された。家康は元亀元年六月に居所を岡崎城から浜松城に移し、国内の平定に努めていたが、そのような中で同三年、武田信玄が遠江に侵攻してきた。従来はその前年にも武田軍が侵攻してきたとされていたが、現在では否定されつつある。

元龜三年の侵攻では、信玄・勝頼の本隊が駿河から西へ進攻し、山県昌景・秋山虎繁の別働隊が北遠から奥三河↓井平↓井伊谷、さらに北上して二俣城で本隊と合流した。三方原で武田・徳川両氏は激突して家康は敗れ（三方原合戦）、信玄は遠江で越年後、西進していった。信玄は野田城を攻撃して信州から帰路に向かうところで発病し、死没することになった。

#### 通説の次郎法師直虎①——直盛の死没まで

さて、直虎については『引佐町史』に詳しいので、その通説的な生涯をまとめておこう。『引佐町史』は「伝記」「年譜」を参考にして記述しており、本書でも両史料が中心となるが、これまであまり指摘されていなかった部分については、あえて引用史料名を提示した。

直虎は、井伊直盛と新野左馬助親矩の妹（祐椿尼）との間に生まれた女子とされる。生年や幼名はわからないが、天正十年（一五八二）八月二十六日に死没したという。法名は妙雲院殿月船祐円大姉。

直盛の子は女子一人だけだった。直盛は、彼の叔父直満の子で彼の従兄弟の直親（幼名亀之丞）を養子として迎え入れ、次郎法師と夫婦にさせようとしていた。直親は天文五年（一五三六）生れとあるから（「年譜」）、直虎ともそれほど年齢差はなかったと想定される。

ちなみに直盛には女子が一人しかおらず、それが後の直虎とされるが、これは「伝記」の

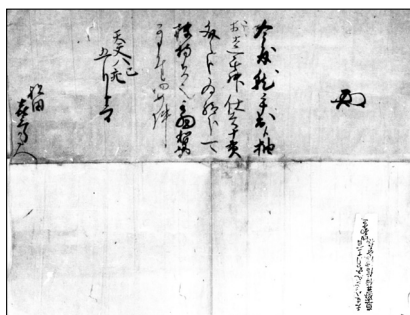
記載であって、「年譜」は別の記述となつている。そこには子どもは「女子ばかり」で、「末の御娘」が直虎とある。だが、彦根城博物館所蔵彦根藩井伊家文書の「井伊年譜」の冒頭に記されている系図の「直盛」項には「息女志人」とされており、「年譜」内で矛盾をきたしている。とはいえ、直盛に男子がなかったという点では一致している。

天文十三年十二月、先述したように直盛の叔父直満と直義が謀叛の疑いをかけられ、駿河府中今川館で自害させられた。このとき今川氏の許へ直満らの謀叛を訴えた小野和泉守は、今川氏への謀叛の芽を摘むためなのか、直親も殺害しようとした。

今川氏から逃れるため、直親は信州伊那郡市田郷の松源寺（長野県高森町）に逃れた。同寺に移ったのは、当時井伊氏の菩提寺龍潭寺の住職だった南溪瑞間なんけいずいもん（系図類では井伊直平の三男とされるが、夏目氏によると実際は養子）の援助があつたからとされる。

直虎は、直親が逃亡したことで悲嘆に暮れ、南溪和尚の許で出家して「次郎法師」を名乗った。命名は元来、備中次郎が井伊氏惣領の用いる仮名で、直虎が井伊氏の惣領として生まれたから、女子であつても「僧俗の名を兼ね」（伝記）て次郎法師としたという。

天文二十三年、小野和泉守が没したために直親も井伊谷に帰国。



天文8年5月11日付井伊直盛判物(蜂前神社文書)

翌年、奥山因幡守親秀の娘を娶ったため、次郎法師は僧籍のままとなった。

その後、五年ほどは特に問題もなく経過するが、永禄三年（一五六〇）五月になると、駿河今川義元が大軍を率いて西進を開始した。義元西進の目的は、いまなお学会において議論が続けられているが、中世史研究者の中では、ほぼ上洛説が否定されており、私も義元は上洛を考へてはいなかったと考へている。その先鋒として直盛も従軍して尾張へ向かい、結果、同月十九日に直盛は桶狭間で戦死してしまった。

### 通説の次郎法師直虎②——家督の継承

直盛の養子となっていた直親は、尾張へ出兵していなかったため、井伊家の家督を継承しようとした。しかし、直盛が討死に際して「中野越後守直由を信濃守に改め、直親の後見とするように」との遺言を残していたことから、井伊谷は一時、中野氏の「預かり」になった。直由が越後守から信濃守に改めたのは、直盛から中野への家督の移動を明確にする意味が含まれていたのだろうか。あるいは信濃守＝井伊氏嫡流の受領名という認識が、「伝記」の作者祖山を始めとする近世の井伊氏の人々にあったからなのかもしれない。

その後、永禄五年、小野道好が今川氏に訴えを起こした。その内容は、「最近、直親が「鹿狩と称して岡崎方面へ出向いているが、じつは徳川家康の許へ往来を繰り返しており、家康

と織田信長と内通しているからである」ということであった。

氏真はそれを糾明しようと井伊谷に出兵を試みたが、新野親矩の弁明や直親自身の釈明に一旦は納得し、兵を収めた。だが直親拳兵の噂が巷に満ちていたこともあって、「陳謝」（「伝記」）のために府中に出向く途中、懸川城西入口で、城主朝比奈泰朝によって殺害された。

その前年、直親と奥山親秀の娘との間に男子が誕生していた。これが後に「徳川四天王」とか「徳川三傑」と称されるようになる井伊直政である（幼名は虎松）。直親の殺害を聞いた直盛の妻祐椿尼は、虎松を連れて兄新野親矩の邸宅に入り、親矩の庇護を得て小野道好から逃れた（「伝記」）。「年譜」では、家臣の今村藤七郎と松下源太郎等が祐椿尼等を連れて逃亡し、南溪の助力を得て引間の直平の許へ移り、翌年新野の屋敷に入ったとされている。

永禄五年十二月には奥山親秀が小野道好から受けた傷がもとで没し、翌年には曾祖父にあたる直平が、この年から始まった「遠州念劇」のうちの対天野氏合戦で急死してしまった。彼の死は毒茶を飲まされたともあるが、『引佐町史』の言うように再検討されるべきだろう。

同七年になると、直親の後見とされた中野直由や、虎松を庇護していた新野親矩が、今川氏に従って引間城を攻撃した際に戦死してしまった。井伊家の主立った人物が死没したため、祐椿尼と南溪は次郎法師を直政の「後見」（「年譜」）と決めた。同八年以降、直虎の文書が確認できるので、直虎が井伊家の惣領的立場として活動し始めたと思われる。



永禄十一年十二月、武田信玄が駿河に侵攻を開始したため、氏真は遠江懸川城の朝比奈泰朝を頼った。これに先だつて小野道好は、一時氏真に従うべく駿河に出向き、その後帰国して虎松の殺害を計画した。虎松らは南溪を頼み、そこから奥山六左衛門とともに三河国鳳来寺（新城市）へ逃げ延びた。これによつて小野氏による井伊谷の「押領」「心儘こころのまま」（「伝記」）な専横が始まった。

これ以後については「伝記」にも「年譜」にも記載がなく、次の記述は天正二年からとなる。だが、井伊氏の対立軸である小野氏との確執については「年譜」でのみ語られている。

永禄十一年に徳川家康が近藤康用・鈴木重時・菅沼忠久ら井伊谷三人衆を井伊谷への引込役として徳川勢に加担させ、三河から遠江に入国させた。一方、小野道好は堀川城（浜松市北区）に入っていたが、翌年四月に家康によつて攻撃され、道好は井伊谷で獄門にかかり、五月五日、男子二名とともに「仕置」されたという。

道好が堀川城に入っていたというのは、永禄十二年三月下旬に起こった堀川城の戦いと呼ばれる攻防戦と思われる。これは、同城を拠点としていた尾藤主膳・山村修理・竹田十郎らが今川氏に与したため、徳川勢が堀川城を攻撃したのである。

同城は浜名湖に接し、井伊谷からは南南西、小野氏の居所と考えられる小野地区からは南方にある。小野地区からは、直線距離で1kmほどである。

しかし、堀川城の戦いに関連する信頼の置ける史料には小野氏がまったく登場しない。道好は本当に堀川城に入ったのだろうか。道好が永禄五年に直親の動向を氏真に伝えたり、同十一年に井伊谷を押領する際には、信玄による駿河侵攻に併せて氏真の許に出向いているということを前提にすると、小野氏が今川氏に従っていたことをとりわけ強調しているようにも見える。

堀川城は今川方と先述した。となれば、道好は実際には同城に入っておらず、後世になって両者を結びつけて語られるようになったと考えることもできよう。

天正二年、直親の十三回忌に伴って直政は鳳来寺を出て龍潭寺に移った。その際、次郎法師と南溪が相談して直政を家康に仕えさせようとした。翌年、無事に直政が家康に仕えることになったが、「伝記」ではこの後、天正四年の直政の初陣、さらに天正十二年の小牧・長久手合戦に話が移る。

「年譜」によると、次郎法師は天正六く七年頃には、龍潭寺の西に建てられた松岳院において、母祐椿尼とともに二人で暮らしていたようである。さらにその後の動向はまったく確認できなくなり、天正十年八月十六日に松岳院で没したという。

以上、「伝記」「年譜」に記載された次郎法師について示した。天正三年、直政の初出仕の際に小袖を仕立てたとか家康が鷹狩をしていた際に次郎法師が直政との対面を準備した、などと語られるが、「伝記」の段階ですでにその記載が存在している。

### 系図上の次郎法師

系図研究に先んじている鎌倉期の研究者が利用する『尊卑』『群書』『系図纂要』に、直虎はどのように記載されているのだろうか。

『尊卑』には、そもそも利世以降の記載がないので、戦国期の次郎法師についても、当然のことながら記述はない。『群書』を見ると、直平以降は直宗と直満兄弟のみが記され、その後、直宗の子として直盛、それに続いて直親、その子直政と繋がっている。女子の記載が見えるのは、直政の次男で彦根藩へと存続していった直孝の長子以降のことである。

『群書』の直盛の事績には、「直盛には嫡子がなく、直満の子直親が従兄弟であったため、家督を譲られることになっていた」とあり、女子に関する文言は見当たらない。つまり、「婿養子」として迎えるということすら、書かれていない。『群書』『井伊系図』の成立は不明だが、延宝四年（一六七六）の記載があるので、それ以降のことである。つまり一七世紀後半、彦根藩井伊氏が認識していた系図には、次郎法師直虎という人物は登場していなかったことになる。

ちなみに「寛永伝」の記述は『群書』の内容とほぼ同じである。ということは寛永二十年（二六四三）以降、延宝四年頃まで、次郎法師の名前が井伊氏の系図上に現れることすらなかったと考えられよう。

『系図纂要』には、直盛の下に直親と並んで「女 二郎法師」とある。そこには「初めは直盛が直親を家督にしようとしたので、一八歳で南溪禪師に師事して尼となった。このとき、井伊氏の嫡であったため男子の字を用いた」とある。『系図纂要』には井伊直弼の記載が途中まで書かれているので、幕末の成立であることがはっきりしている。

これまで述べてきたように、「伝記」が享保期に作成されたことをみれば、『系図纂要』はその説を踏襲しているに過ぎない。

このように見てくると、系図上に次郎法師が登場するのは、『群書』の作成された（早くても）延宝四年以降（二六七六）であり、かつ「伝記」の作成された享保十五年（一七三〇）以前のことであることがわかる。つまり、この約半世紀の間に次郎法師が登場させる意味があったと捉えることもできる。それについて、以下において考えてみよう。

### 「伝記」成立の意味

享保十五年に作成された「伝記」が次郎法師の登場する最も早い史料である。「現時点」で

の最初期ということではあるが、この「伝記」に書かれている」ということが重要である。本史料は、龍潭寺の祖山が「井伊直盛から直政にいたる井伊家苦難の時期をドラマチックに描いた」(夏目琢史<sup>たくみ</sup>二〇七〜〇八頁) 編纂物で、「井伊家と龍潭寺との関係に翳りの見え」段階で、「菩提寺」としての龍潭寺の歴史を、彦根藩に向けてもう一度説明する必要があ」って書かれた(同書二〇七頁)、としている。「もう一度説明」とはどういうことなのか。

夏目氏によると、これは正徳元年(一七一二)に起きた「井之出入<sup>いのでいり</sup>」と呼ばれる龍潭寺の門前に残されている始祖共保出生伝説のある井戸(「由緒の井戸」とされる。第一章参照)の争論に関するものであった。争論は、正徳頃に井伊谷を支配していた旗本近藤家が支持する真言宗寺院の正楽寺と、中世に井伊谷を治め、正徳年間には彦根藩とその分流与板藩に分かれていた井伊氏の支持する臨濟宗寺院龍潭寺が井戸の帰属をめぐって争ったのである。

本来ならば単純に、在地の支持を受けていた正楽寺に軍配が上がりそうなものであったが、井伊家が関わったため、寺社奉行も巻き込んで話が大きくなり、結局龍潭寺の勝訴に終わる。訴訟の間に祖山は何度も彦根・与板両藩藩邸を訪れている。祖山の代になって、はじめて井戸と龍潭寺との関係性を記した由緒書が作成され、龍潭寺も両井伊氏との接点及び支持を得ることができた。その接点が、彼一代で終わることのない継続的な付き合いへと繋がった。その継続的な交流の最初期に「伝記」は作成されたのである。してみると、「伝記」は龍潭

寺と両井伊氏を繋ぐ重要なアイテムだったと判明する。そのアイテムは、①龍潭寺と中世井伊氏が長期にわたる継続性を持って関わっていたか、もしくは②ある時期において、どれだけ深い親密性を持っていたかを示す必要がある。それを示すことで、どれだけ両者が深い関係にあったかを「伝記」の読者に伝えることができるからである。

### 次郎法師登場の背景

夏目氏の著書によると、「伝記」の作成にあたり、祖山は井伊谷周辺の歴史をいろいろ調べたようだ（夏目著書二〇四・二〇五頁引用史料など）。「由緒の井戸」は井伊家の始祖共保関連のものだから、詳細に記述する必要もあつて伝承を中心に書き綴つたのだろう。

また鎌倉く室町期の井伊氏についてもおそらく調査したであろうが、関連史料は確認されなかった。その一方で直盛以降、家康までの戦国期の史料は存在する。特に、直盛は龍潭寺の中興開山（夏目著書二〇四頁）でもあり、かつ直盛の関連文書に直平の名も見えることから、龍潭寺と井伊氏との関係性を強調するのにふさわしい条件が整うこととなる。

ここで祖山は、①よりも②を選択する方が現実的と捉えたのではないか。鎌倉く室町期の井伊氏についてはあえて何も記さず、直平以降の井伊氏との結び付きを詳細に描こうとしたと思われる。

ただ②を選択しても、可能な限り①を考慮した方がよい。戦国期、継続的に井伊氏と龍潭寺が交流し続けていることを示すのは重要なことである。祖山は龍潭寺に居住していたのだから、同寺の位牌や過去帳・古文書類は、ある程度把握していたであろう。

だからこそ井伊氏当主の法名や、永正四年九月十五日付の井伊直平寄進状写〔『戦今』一八九〕や、永禄八年九月十五日付南溪和尚宛の次郎法師寄進状〔『戦今』二〇五〇〕も引用したのだろう。記述がほぼ編年なのも、継続的な交流を示す手法ゆえだったのだ。

以上を前提に、ここからは想像の域を出ないが、次郎法師登場の背景を探ってみよう。

祖山は龍潭寺で、位牌・過去帳等から「次郎」が中世井伊氏の家督も使用した仮名・通称であることを認識した。そのため永禄八年の寄進状を書いた「次郎法師」は当主に近い人物と考えた。しかし、中興開山である直盛は同三年に、後嗣直親も同五年に死没している。彼らよりも没年が遅い人物を探す必要がある。

そうしたとき、龍潭寺内に残されている位牌等に、天正十年に亡くなった人物がいた。法名は「妙雲院殿月船祐円大姉」だが、没年は直盛・直親以降の人物であることは間違いない。「大姉」とあるので女性である。しかし、その位牌等以外に確認できないのであるならば、次郎法師は妙雲院殿だった。祖山はこう考えたのではないだろうか。

その傍証となるかもしれないが、祖山は次郎法師＝直盛息女＝妙雲院殿と認識はしている

ものの、次郎法師Ⅱ直虎、もしくは直盛息女Ⅱ直虎、という表現はまったくしていない。つまり、女性であることは認識していても、男性名である「直虎」を名乗ったとはどこにも記載がないのだ。このことから、直虎が次郎法師もしくは直盛息女と指摘したのは、後世の研究者たちであったとすることができる。

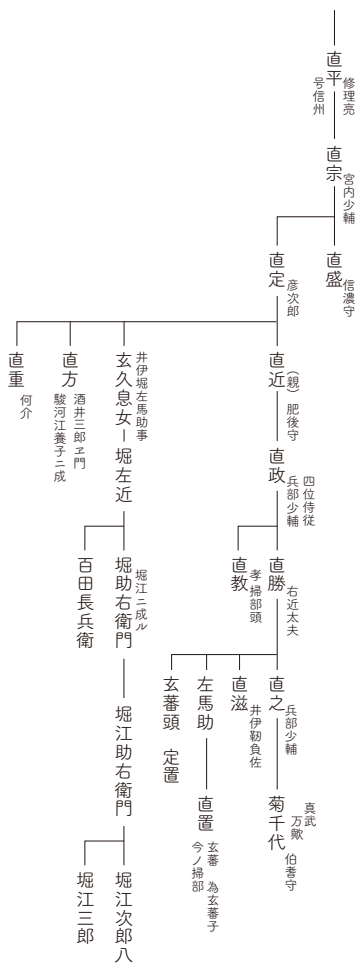
### 異質の系図

ところで、井伊氏に関する系図の中で、興味深いものが一点あった。それは浅羽本系図二十七「井伊・奥平」である（次頁系図四）。この系図は、水戸徳川家で作成されていたが、焼失してしまい、現在では東京大学史料編纂所に写が残されているに過ぎない。この系図の特徴は、直満を「直定」と記すだけでなく、直盛の弟に位置付けていること、さらには直親に弟妹がいたと記されている点だろう。

この系図とほぼ同様の系図は、すでに『引佐町史』に「藤原氏井伊氏奥山系図并諸親類之次第」（奥山平田八江蔵）として紹介されている。『引佐町史』ではこの点についてはまったく触れていないので、少し考えてみよう。

三二頁等に示した系図類には、直親は直満の一人息子としており、直盛からすると従兄弟の間柄であった。本系図では、直盛の弟が彦次郎直定と記されている。直定が「直近<sup>（親）</sup>」の父





系図四 浅羽本系図廿七「井伊・奥平」

にあたることから、彼が他の系図で言う直満のことを伝えているとして間違いない。仮名が他の系図類と同様、彦次郎であることもそれを裏付けている。ということは、直親は直盛の従兄弟ではなく甥であったということになる。

また、直親を直盛の子として記す場合、直親の部分に「養子」と書いたうえで、次郎法師の部分に「女子」(『寛政譜』)、あるいは「尼」(『藩翰譜』)を底本とした「井伊家譜」と二人を並記

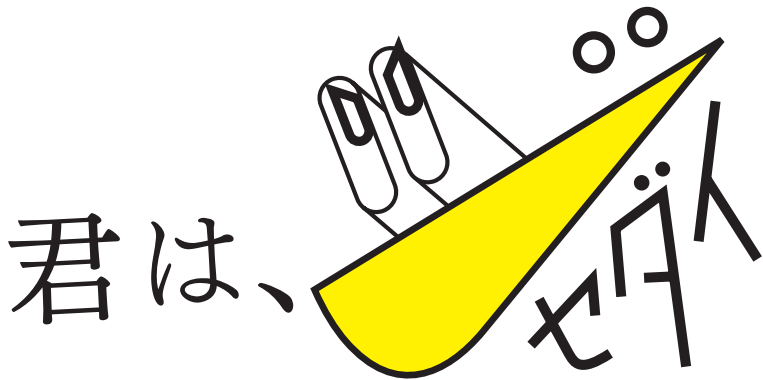
しているものがある。しかし、浅羽本系図には直盛に子どもがおらず、直親のほか三人の弟妹の記述があるのだ。

本系図が正しいものであるならば、この系図は重要なことを物語っている。つまり直盛の子の記載がないのだから、彼の子としての次郎法師は存在しなかったことになる。また『寛政譜』等のように、直親と次郎法師＝女性を並記するといったことを考慮に入れると、「玄久息女」という人物が次郎法師にあたるということも考慮に入れなければならない。

本系図では玄久について、「井伊堀左馬助」のことに記している。井伊氏の一門に堀氏があり、後に堀江氏へと名字を改めたとされる。その堀左馬助の息女が直親の妹のように扱われ（養子に入った？）、次郎法師と誤って伝えられたとの可能性も出てきたことになるのである。

なお、「玄久息女」が「直親の妹」の部分に記載されている点に注意してみると、幕末まで彦根藩の家中にあった「酒居三郎兵衛忠常（後に勝正に改名）」の母がその彼女にあたるという記事も存在する（東京大学史料編纂所架蔵「彦根藩家中貞享異譜」七）。三郎兵衛が系図の「三郎エ門」と同一人物なのかは不明である。

以上、次郎法師の登場について検討した。続いて「伝記」が次郎法師直虎を女性として認識している点に注目し、戦国期における武家の女性について検討してみよう。



君は、

ゼダイ人

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**